

基調講演：「主体性評価」にどのように向き合うか —地方国立大学の立場から—

佐賀大学アドミッションセンター教授

西郡 大 氏

【講師紹介】

梶田豪利特任教授(司会)：

それではこれより、基調講演となります。題目は『「主体性評価」にどのように向き合うか～地方国立大学の立場から～』です。佐賀大学アドミッションセンター教授西郡大先生、よろしくお願いいたします。

(拍手)

西郡大教授：

佐賀大学の西郡と申します。今日は主体性ということで、全国の関係者が非常に敏感になっている難しいテーマを取り扱うわけですが、私の話としては、主体性の評価を考えていく上で、いろんな観点であるとか、考え方というものをお話させていただきたいと思っております。

大きく分けて4つのテーマで話しますが、メインはこの2と3のところになります。時間があれば地方国立大学、佐賀大学の話になりますが、その事例について少しお話できればと考えております。ではまず個人認識としての主体性ということになりますが、少し会場の皆様にご協力をいただきたいと思います。こちらをご覧ください。手元の資料でも構いませんけれども、今から3つの記述が出ますので、それぞれを読んでいただいて、高校生を対象にイメージしていただきたいんですけど、これは主体性を持っているかどうかを判断してほしいと思っております。

個人認識としての主体性

まず一つ目です。「自ら進んで積極的に物事に



取り組み、自分の意見をはっきりと述べる事ができると共に、自分に自信を持っている」。二つ目です。「目に見える顕著な行動として、確認することはできなが、自分自身で物事をしっかりと考えているような様子が見られる」。いかがでしょうか。主体的だなというふうに捉えられますでしょうか。3つ目です。「一見、不器用で成功にたどり着くことはなかなかできないが、その失敗を反省し、地道に課題を乗り越えていく姿勢が見られる」。こういった様子が見られる3名の生徒が前に立ったとして、皆様はどういうふうに判断されるでしょうか。

さらに、これに対して主体性があると評価する順に並べ替えていただきたいと思います。少し考えていただけますでしょうか。何番、何番、何番というふうに考えていただきたいと思います。時間もありますので、もうインスピレーションで構いません。組み合わせとして、6つともうひとつは全部イコールというふうになると思います。1, 2, 3だったっていう方は、どのぐらいいますでしょうか。はい。1, 3, 2。はい。2, 1, 3。あまり多くないですね。2, 3, 1。少し上がります。3, 2, 1。ちょっと上がりました。3, 1, 2。はい。全部1, 2, 3イコールかという方。

はい。これだけ、7つのパターンがありますが、多い少ないはありましたけれども、それぞれのところでばらばらに手が上がりました。皆さんが同じところで手を挙げられると困ったんですけれども、結果的にばらついて良かったです。何が言いたいかと言いますと、評価する人であるとか評価する分野、あるいはその背景、そういったものの違いによって、主体的っていうもの、主体性の捉え方っていうものは当然異なると考えられます。さらにその捉えることが難しい主体性なんですけれども、それについてさらに程度を比較する、このことはもっと難しいと。ですが、その中で、学力の三要素として言われている主体性を持ってうんぬんというものを評価することが求められているわけです。この非常に難しいこの主体性という山に対して、我々はどのように向き合うべきなのかと。そういったことを少し考えてみたいと思います。

「主体性とは何か」。今日のテーマになりますが、インターネットとかで文献などを調べてみますと、主体性とは何かと。哲学者のサルトルが議論しているというのがありますし、後ほど宮本先生からも触れられるかもしれませんが、心理学の分野ではエリクソンという人が主体、アイデンティティという観点から議論しています。最近の文献では、これは医学教育の分野で書かれたものですが、主体性は教えられるかといったものがあります。いろんな形で主体性というものは議論されているわけですが、やはり非常に難しい。どう捉えればいいのか、なかなかこれだというものはないのかもしれませんが。ちなみにこれは、参考資料として学習指導要領の中では主体的な学びとかっていうキーワードと関連して、主体的に学習に取り組む態度であるとか、学びに向かう力であるとか、そういった言葉で整理されています。

では、実際に教育に関わる人たちはどう捉えているのかということですが、関西学院大学さんが文部科学省の委託授業の中で主体性について調査をされています。その情報を少し

引用させてもらっているんですが、高校の先生方が考える、「探究活動において主体的だと考えられる行動の例」というのは、整理するとこんなものだそうです。授業外の自主的な活動であるとか、他者と積極的に意見交換をするとか、発表の場に参加する。こういったことが探究活動における主体的だと考えられる行動の例ということになっています。一方で大学の教員が考える、こちらはちょっと対象が違うんですけれども、正課教育、これにおいて主体的だと考えられる行動の例というのは何なのかと言いますと、学生が課題に対して、他の学生と進んで議論をしているとか、指示していない課題に取り組んだ時とか、授業中に板書の内容に疑問が生じて質問をするなどです。これらのことは佐賀大学にも調査が来たんですけれども、同じような回答が多かったと記憶しています。一方でこれは参考情報ですが、企業の人事担当者が新入社員に対して主体的だと考えられる行動の例ということで、こういったことが挙げられています。

いろんな捉え方があるとは思いますが、これを大学入試という場面で、ざっくりと捉えようとする、こういったことじゃないのかなと私個人としては解釈しています。「自らの学びを深めようとする姿勢や行動」に関するものかなと。こういったことをイメージして、本日、主体性ということについて、話していきたいと思います。また、いろんな主体的な活動とか、主体性というものに関して議論する際には、やはりいろんな人たちがいるわけですね。どこの学力層を私が想定しているかということ、あくまで地方国立大学の立場ということで今日はお話しますので、偏差値帯としては50から60弱ぐらい。ここら辺に該当する集団をイメージして、今日はお話させていただきます。

主体性評価へのアプローチ

主体性の評価。いろんな考え方、捉え方があると思いますので、少しいろんな立場から考えて

みたいと思います。まず行動主義的立場ということで、行動とかそういったものに注目しようという考え方です。これは何なのかというと、主体性を持っている子たちは、主体性があるがためにそれが行動に移ると、その行動を通して、生徒会であるとか、いろんな実績等を作って、それが成果や実績に結びついていると、だからこの成果とか実績とかっていう客観的な情報を見れば、それは主体性というものを間接的に見ることができるだろう。成果や実績、この行動を通して見えるものに注目して評価しようという考え方です。ですが、本当に主体的と言えるかどうかは疑問です。当然のことながら例えばリーダーを決める際に、自ら手を挙げてリーダーになった人もいるかもしれませんが、じゃんけんで決めたり、輪番制で決めたりすることも考えられます。そのため、これだけの情報で、この子は主体的だなと判断するのは恐らく難しいということもありますし、いろんな課題があるかと思えます。

一方でこういったことも重要だということが言われています。「プロセス」ですね。プロセスを重視する立場ということで、学びであるとか活動、そのプロセス自体を重視しようという考え方です。どのように学んだかとか、あるいは何か困難に直面した際にどう乗り越えたとか、そういったところになります。そして、それを評価する材料として注目されているのが、例えばポートフォリオと呼ばれるようなものです。学びの過程をいろんな形で情報として蓄積して行って、その場での先生方とのやり取りであるとか、エビデンスであるとかっていうものを蓄えていくものです。ですがこれも、なかなか一筋縄ではない課題があります。というのも、それぞれの教育活動を行う個人によって、その文脈であるとか背景というのがかなり異なるということも考えられますし、これをあえて評価しようとした時には評価基準というものを作りにくい。さらに膨大な情報量がここにはありますので、その評価に要する時間というものが相当かかる

ということで、コストとしては高くなるということがあります。

これらの点を整理しますと、さっきのひとつ目に出てきた行動主義的な立場からの評価ということを考えますと、例えば書類審査とか面接試験において、結果とか成果をメインに見ると、そうすればその客観的情報だけを見ればいいので、評価コストは最低限になります。当然、評価対象者も増えていって、多くの受験生を対象に評価することもできると考えられるんですが、やはり難しいのは異なる分野の活動実績です。サッカーの競技人口とマイナーな競技人口の活動を比べるっていうのは、基本的に難しい上に、本人がどれぐらい関与したのかっていうその真偽性というのなかなか確認することができないという課題があります。一方でプロセス重視の立場から考えますと、この書類審査や面接試験に加えてパフォーマンステストとか、いろんな形が考えられますが、そのたくさんの情報を対象に評価しますので、評価コストというのは高くなります。ですので、丁寧に見るために限られた受験者を想定しなければならないころがあります。そういった意味では評価にかかる時間であるとか、適切なループバックの作成が必要になるわけです。これに関しましては、AO入試とか推薦入試などの特別入試で取り扱うことは可能かもしれませんが、一般入試とかも含めて検討する際には色々考えなければいけないということになります。ここで言いたいことは、どちらか一方がよいということではありません。

ではそういったことを踏まえて、じゃあ評価を実際に行おうというふうに考えた際に、こういった作業が考えられるのでしょうか。いろんな作業の考え方があるかもしれませんが、仮に主体性とか協調性という概念があったとして、じゃあこれを評価するために、複数の評価者で評価しようとなった時には、自分が抱えているイメージだけでは評価できません。ある程度他者と共有できるものを持たなければいけない。そうした時に、主体性を持っている人たちはど

ういった行動を起こすのかなということを考えながら、目に見える行動に落としながら評価基準というものを考えていく必要があります。主体性や協調性がある人は、どういった行動とか姿勢につながるんだろうかということ考えていくわけです。ですので、言い換えればこういった資質があるんだとすれば、どんな行動を取ろうかということを考えながらやっていくことになります。何々の場合、〇〇をしている。そういったふうに、具体的な行動とか様子を洗い出して行って、それをもとに評価基準の作成をしていく。こういったアプローチが考えられます。

このように作った評価基準を用いた評価というのは、構造化した評価と言われます。例えば、主体性というのを、「自ら明確な意志を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」と捉えるのであれば、5点満点で採点する場合、一番高い「5」は、「明確な意志を持ち、当事者意識を高く行動をしている」というようなものであったり。逆に低い基準である「1」あったら、「周囲に依存しており、物事に対する当事者意識が希薄である」といったイメージになります。この基準をどのぐらい具体的にすかかっていうのは、それぞれの評価の考え方によるかもしれませんが、このように少なくともこの間隔性は担保できなくても、順序性というところぐらいまでは、ある程度想定しながらこのルール化をしていくということになるわけです。これをやるためにはやはりその前にお示ししました、具体的な行動、そういったものをもとに基準を作成していかなければいけないということになります。

ですが、じゃあルールを作ればいい評価はできるのかというと、必ずしもそうではないと思われま。これは面接試験の例なんですけれども、ある大学のAO入試において、面接者が複数いて、その評価の一致率をみたものです。例えば工学部だったら、工学部の先生たちがその工学部に関する専門的な関心とか、そういったことについて質問したことに対しての評価の一致率は、50%から80%程度でした。一方で、何と

なく漠然とした志望意欲であるとか、態度であるとか、その専門分野とはちょっと違うところの文脈で評価するものに対しては、これはものすごく低いんですけれども、10%に届いていないということが報告されています。じゃあこういったことに対してどうすればいいのかと言うと、当然のことながらルーブリックなどをもっとルール化して、構造化して、強化すればいいじゃないかという話になるんですが、本当にこれでいいのかという疑問があります。一致率は当然高くなるかもしれませんが、何のために面接試験とかをやっているかという、やはり面接者と受験生との対話的な相互作用で生じるいろんな展開の中で評価をしようというのが1つの狙いです。そうすると、過度にルール化してしまいますと、そういった視点を一定の枠組みに押し込めてしまうというふうな、せっかく面接試験でやる意味が薄れてしまうと。あまりに一致率にこだわってしまえば、質問紙で聞いた方がよっぽど効率的だし、その方が一致率の高い試験ができるということになるわけです。

そういったルール化する方法というものを踏まえて、もうひとつ、こういった枠組みも提示させていただきたいと思います。分析的評価と総合的評価、呼び方は色々あると思いますが、こんな考え方ができると思います。まず、分析的評価ですが、色々評価のルールを作って構造化して、分析的に評価しようというものです。例えば主体性と言っても、いろんな観点があるでしょうということで、ここでは3つの観点を決めてそれぞれに配点を振ります。この観点3は30点与えますというような形で、それぞれの観点到応じて点数を付けていって、その合計点を見るようなものです。こうすると、非常に採点する方はやりやすいんですが、この観点をどのように設定するかとか、どのようにウェイトを置くのかという難しさがありますし、さらにこの部分の総和が全体の印象と一致しないということも多々あります。佐賀大学でも芸術系の分野がありますけれども、芸術分野の先生方は、こうい

った部分点の総和ではなくて、全体的な観点から見る方がいい評価ができるというふうに言われます。またこれって、かなりルールが多いので、時間もかかるという課題点があります。

一方で総合的評価っていうのは、自由度がこちらよりもやや高いものです。観点はひとつ。全体的な視点で総合的に評価しようというもので、一観点を設けてそれを評価するというものになります。ただ欠点として考えられることは、当然のことながらルールがやや漠然としますので、評価する人たちが共通のルールに基づいて、うまく共有化できないというところがありますし、先ほど信頼性という話がありましたが、少し疑問符が付くかもしれません。どちらがいいのかというところは、それぞれどういった募集区分で評価するのかというところにもよりますけれども、どう使い分けるかというところも、評価の観点からみると、とても必要なものではなからうかと思えます。

その中で、しっかりと主体性というものを評価して、その評価に応じて識別していこうとした場合に、やはり点数差としてはばらついた方がいいわけですが、これには非常に難しいところがあります。例えば活動や実績、そういったものを中心に評価しようとした場合、こういうのは簡単なんです。例えば3人の評価者がいて、3人ともみんな高く評価するものですね。例えば、数学オリンピックとかの受賞者が来たら、みんなこれを高く評価します。全員が一致して、誰もが高い評価を与える。この評価は比較的簡単です。逆に、その3人の評価者がみんな低く評価する。出されてきたものがもう、資料としても非常に不十分で、ちょっとこの子を受け入れると入学後大変かなというものも比較的評価しやすい。つまりAとCというものは簡単に識別できるんですけども、やはり一番大きいものはここなんです。評価に差を付けにくい内容という部分です。つまり、明確な根拠とか理由を持って、細かい点数化っていうのが非常に困難な部分になります。このBというのをあまり広く取

りすぎても差が付かないので、付けたとしてもここを中心にAまでは届かないけれども、ややプラスかなと。Cまでは行かないけれどもややマイナスかなということで、現実的にはせいぜい4段階か5段階評価っていうのが現実的かなと思います。そう考えた時に、さっきの分析的評価っていうのがありましたけれども、その評価観点別にこういったものを積み上げていった時に、いろんな誤差が積みあがった形で、最終的な評価に影響を及ぼすかもしれません。ですので、先ほどの分析的な評価と総合的評価っていうのを考えた時に、個人的には大量の受験生を対象とする際には総合的評価の方が適しているのかな、まだ妥当なのかな、理想的だとは言えませんけれども、まだましなのかなというふうに考えております。

色々評価について見てきましたけれども、それぞれ大学入試で行った評価方法というのは当然のことながら検証をしなければいけません。例えば、入学後に大学の先生たちが、この学生主体的だなというふうに評価する。そういった学生の多くが仮に入試で主体性を評価していた時に、その主体性の得点が高ければ、ある程度その評価の妥当性というものが担保できるわけですが、もうちょっと検証を積み上げていって、他の能力や資質ですね。知識とか技能、思考力とか判断力。いわゆる学力検査等の得点と、入試の時に評価した主体性の得点の関係性において、強い相関関係があったらどうなのか。こんな解釈が成り立つかもしれません。主体性を持っているという人たちは、主体的に動いて、これらの能力を身に付けている。そうした時に、この主体性というものを直接的に見て評価するという意味はどれぐらい重要なのかというところに行きついてしまいます。

それを整理すると、こういうふうなイメージになります。ここは直接的に主体性を評価するタイプです。これは間接的に評価するやつなんですけれども、主体性を直接評価しなくても、他の評価で、間接的に評価できるとする。さらにそ

の評価が、公平性が確保されていて、さらに効率的であったとすれば、どういったことが起こるかという、当然のことながら実施する大学としては、それはこっちでしょうということになるんじゃないかと思います。そうなった時に、入試の評価とは別に考えておくべき視点というところをちゃんと踏まえておかなければいけないということになります。中教審の答申ではこういったことが言われています。「接続段階の評価の在り方が変われば、それを梃子のひとつとして、高等学校教育及び大学教育の在り方も大きく転換すると考えられる」。つまり、大学入試の影響力を以て高校教育に一定の何かしらの転換を促そうというようなのが趣旨です。ここをどう捉えていくのかというのが主体性評価においては、考えておかなければいけない視点ではないかと思います。

入試制度設計で意識すべきこと

ということで、今の考え方を踏まえて入試制度設計で意識すべきこと。いろんな観点があると思いますが、ここではあくまで一般入試で、仮に評価するということを想定した場合ということでお聞きいただければと思います。入試がもたらす影響力ってというのは、高校現場において非常に大きな影響をもたらします。例えば、大学入試において主体的な活動や実績を評価しますよというふうに宣言した場合であれば、高校時代の生活で生ずる活動とかっていうものが活性化するかもしれません。その中で健全な動機付けの中において、それを素直にアピールするんだったら、それはそれで理想的な形かもしれませんが、なかなかそうはいかないのは現実だと思います。生徒たちにとって、やはり大学に入学したい。第一志望の大学に行きたいというのが根幹にありますので、どんな活動や実績が入試に有利なのか、入試に有利な活動や資格を優先的に取ろう。自分がやりたいことよりも、それを優先的にやろうという動機付けられることは十分に考えられるわけですし、一部の指導熱心

な先生がいらしたら、「そんな活動や実績じゃ、主体的だと評価してくれないぞ」というふうに指導されるかもしれません。つまり、ある種主体的であるということを道具的に使うことが考えられるわけです。当然のことながら、生徒たちが自らやろうという主体性というものはかけ離れたものになっていく可能性が高くなります。こういったものをどう考えるかというところが、ひとつ重要な点ではなかろうかと思います。

そこで、色々な考え方があると思いますが、私自身は最近、少しこういうふうに考えています。大学が、主体的な活動実績を評価しますよというふうなことを言います。あるいは、マスコミがそういった入試になりますというふうに言うと、どうしてもやっぱり受け手の側としては、中高一貫校やSSH校が有利だとか、課題発見型のカリキュラムの方が有利だというふうに、過敏な反応っていうのがあったりします。ですが、本当にそこまで反応する必要があるのかというところを、少し考えてみたいわけです。こういうふうな反応が起こる背景には、入試での評価の内訳が、主体性というものが8割ぐらいを占めて、その他の評価方法がぎゅっと脇に押しやられるような。つまり、入試で主体性等の評価が合否を決定付けるような印象を持つんですけども、これはもちろんAO入試とかであったらこういった形もあるかもしれませんが、一般入試とかにおいて、そういったことが起こるといえるのは、少し考えにくいのではないかと思います。

本当に合否を大きく決定付けるようなことになるのかということ、ここで考えてみたいと思います。実際の評価ということで、ふたつのケースを示しますが、ここでケース1として示すのが一番オーソドックスな形です。一般入試だと考えてください。共通テスト500点。個別学力検査400点。そこに主体性100点ということで、この合計点で評価しますよと言うと、こういう配点なのかというふうに受け手側は思います。ですが、これをあえてこういうふうに考えてみたいと思います。共通テストと個別学力検査と

なというのが非常に難しいんですけども、こういったものがどういった状態なのかを考えていく方が、重要ではないかと思えます。それを絵にしますと、やはり一般入試でするので受験生である高校生が、日ごろの学習活動を通して、努力が直接的に反映されやすい土台。学力検査なんていうのは最たるものかもしれませんが、そういったものを土台にした上で、主体性評価を課すことによって、高校生たちが日ごろの高校生活を通して頑張ってきたことを一度振り返られるような、そういった意味合いも含めた位置付けが必要になるのではないかと思えます。

さて、主体性の話、その評価の話をしてきましたけれども、実はそれとは別に考慮すべき大前提があります。これは特に大学の関係者にとって必要な視点ではなからうかと思えますが、主体性評価というと評価方法に注目が集まりがちなんですけれども、もっと重要な前提があります。それは何かというと、これは金魚の水槽。金魚すくいだと思ってください。この水槽の中の金魚が受験生だとして、全ての金魚が、その大学にとって欲しい金魚だと思える金魚だったら、もう道具なんて何でもいいんです。網を使ってもいいですし、金魚すくいを使ってもいいわけですね。どの道具を使っても自分が欲しい金魚が取れるわけですので、受験の文脈で言えばクジでもじゃんけんでもいいわけです。そうすれば、その欲しい人材が取れるわけです。一方で、全ての金魚が欲しいと思えない金魚だったら、どの道具を使っても全く意味がない。何を使って取っても、取りたい金魚ではないわけです。ところで、どの道具が適切であるかが重要になってくるのはここですね。欲しいと思える金魚が一定数いる場合。自分が欲しいと思う数と同程度いる場合は、欲しい金魚を選定して、確実にすくえる道具は何なのかということを考える必要があります。こちら絵も同じですけども、欲しいと思える金魚が少ない場合ですね。自分が欲しいと思う数より少ない場合は、確実にそれをすくった上で、足りない部分をどう補うかとい

うことになります。要は何が言いたいかということ、評価や方法ということを検討するのも重要なんです、欲しいと思える。あるいはアドミッションポリシーに沿っている志願者層を形成しない限り、この方法の議論をしても意味がないということになります。しっかりとこういった志願者集団というものをどう形成するのかということをやった上で、評価方法を大学としては考えていかなければいけないということになるかと思えます。

地方国立 S 大学の事例

残り 10 分弱ですので、最後に事例をご紹介します。佐賀大学は、地方国立大学です。ここは東北ですので、もう遠い、九州の話になります。こんな大学です。6 学部あって、学生数は大体 6,000 人ぐらいの大学。そういった大学の話ということになります。佐賀大学では高大接続改革を進めているんですけども、この学力の三要素と呼ばれるものに対して、共通テストで見るところ、あと個別試験で見るところ。これは一般入試ではないですけども、ペーパーベースドテストに加えて、タブレットとかを用いた CBT などを活用して、思考力等を見ようということを行っています。今日のテーマである主体性等ということに関しては、この特色加点という制度が対象です。この考え方ってどういったものかって言うと、あえて加点分を当初の配点から外に出します。つまり、外に出すことによって受験生に意識してほしいというものです。特色加点は、申請してもしなくても構いません。申請すれば、アドミッションポリシーに応じて何かしらの形で加点。なければそこは点数が入らないということになります。申請の様式は、活動実績の名称とか実施機関、活動期間や活動概要に加えて、申告する実績とか活動を通して身に付けた能力とかスキル、あるいは経験等が、大学入学後にどう活かせるのかなど、アドミッションポリシーとの関係性を記述してもらおう予定です。この部分は、アメリカ

の入試でいえば、エッセイみたいなものになるかもしれません。受験生のアピール部分です。ですので、例えば理系の分野で有利な活動実績ってなんですかというふうに聞かれるんですけども、もちろんその探求型の活動とかがあったら、それが評価されるかもしれませんが、全く別の分野で入学後にこうした経験が生かせますというふうにアピールさえできれば、そこに点数が入らないわけではありません。あくまでも一般入試を対象として、こういった制度設計をしています。

その中で今言いましたように、「申告する実績とか活動を通して身に付けた能力とかスキル、あるいは経験等が、大学入学後にどう活かせるのかを書いてね」というふうに、大学側はメッセージとしては発信するわけです。そうすると、高校生はこれまでの自分を振り返ることになります。じゃあ効果的なアピールするためには何が重要かって言うと、これは就職試験でも一緒ですけれども、結局何を学ぶのかとか、どんなことを求められているのかということを知らないと、十分なアピールできないわけですね。つまり、1回ここで振り返ってもらい、高校までの自分と大学で求められているということを一度すり合わせてもらいたいと考えています。その狙いは何なのかというと、主体性の評価というよりも、大学と学生のマッチングということになります。

では一般入試においてどう評価するのかということになりますが、基本的にボーダー層が対象になります。さっき出てきた絵のように、特色加点申請書を採点してゼロ点であっても合格となる受験者層。逆に、満点であっても不合格となる受験者層は特色加点として採点しても最終的な合否の結果に影響がないので、ここは採点しません。ここの入れ替わる可能性があるところだけを採点するということになります。ちなみに、この部分の得点帯ですけれども、本当に1点差の中にたくさんの受験者がいます。その数点差で、合否が分かれている層なんですけど、この点数差に、本当に能力的な差っていうのがあるの

かっていうと、あまりない。であれば、違った側面を評価して、そこだけでちょっとひっくり返してはどうかという考え方になります。大学や学部にとってミスマッチの学生を一人でも減らすことができるということは大きなメリットとなるのではないかと考えます。

最後にですけれども、こういった形がひとつの方向性として考えられるだろうというところをお示しして終わりたいと思います。これまで、紙で出願を行う際ですけれども、願書とか何か活動実績を出すのであれば、それと一緒に根拠資料や参考資料を出すということが一般的でした。ただ、紙でやると新聞記事とか賞状とか証明書。そういったものを何枚以内でしっかりと整理して出してくださいねって言わないと、膨大で紙で提出されてもそれを評価するには限界があるという評価環境上の問題点があります。ですが、今年から佐賀大学とか、九州地区の国立大学では導入を始めたんですけれども、インターネット出願が導入されることによって、ひとつの形としてこういった可能性が生じてきます。受験生はネット上から志望理由書であったり、活動実績とか学修計画書などの大学が求める項目を入力します。そこに根拠資料として、例えば新聞記事のハードコピーとか、場合によっては写真とか、いろんなものが添付できます。ここにはeポートフォリオって書いていますけれども、これがないと不利になるというわけではなくて、ひとつの根拠資料としての幅が広がるということです。例えば、高校時代における発表会とかの動画であるとか、何かしらのコンテンツであるとか、いろんな情報などを蓄積することがあると思いますが、それをショーケースという形に集約すれば、これまでにはない情報量をもった根拠資料となります。そうすると、申請書の文章のうまい下手とかで、差が付くんじゃないのかっていう心配があるかもしれませんが、どんなに素晴らしい文章を書いても、その根拠はどうなんですかというふうに見ていくと、この主張はあまり根拠がないねといった印象に左右され

ない評価にも繋がるものだと思います。これが必ずしもベストだとは思いませんけれども、これまでとは違ったアピールの仕方、幅が広がるということで、ひとつの形ではなかろうかと思います。もちろん、AO入試や推薦入試で深く、その生徒の情報をたくさん見たいという場合は、こういった情報の広がりには役に立つのではないかと思います。佐賀大学では今度の一般入試から実際にこれを導入します。こういったものを通じて、一般入試の中においても、システム的にある程度評価環境というものを整備して、書類審査として主体性に関わる評価していきたいと考えているところでございます。以上で、私の報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。


(拍手)

樫田豪利特任教授(司会) :

西郡先生, ありがとうございました。ご質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

資料

「主体性評価」にどのように向き合うか？ ～地方国立大学の立場から～



西部 大（佐賀大学）

3

「主体性がある」と評価しますか？


- 1 自ら進んで積極的に物事に取り組み、自分の意見をはっきりと述べるができるとともに、自分に自信を持っている。
- 2 目に見える顕著な行動として確認することはできないが、自分自身で物事をしっかりと考えているような雰囲気がある。
- 3 一見、不器用で成功に辿り着くことはなかなかできないが、失敗を反省し、地道に課題を乗り越えていく姿勢がみられる。

上記①～③について、「主体性がある」と評価する順に並び替えてください。

4

本日の内容

1. 個人認識としての「主体性」
2. 主体性評価へのアプローチ
3. 入試制度設計で意識すべきこと
4. 地方国立S大学の事例



5

みなさんの評価結果は？

1 2 3	3 2 1
1 3 2	3 1 2
2 1 3	1 = 2 = 3
2 3 1	



5

個人認識としての「主体性」


3

個人個人の主体性認識は多様？

- 評価する人、評価する分野、背景などの違いによって「主体性」の捉え方は異なるものと考えられる。
- 捉えることが難しい「主体性」について、さらにその程度を比較することは、もっと難しい。
- しかし、「学力の3要素」の1つとして、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価することが求められている。

どのように向き合うか？

- ・ 何を考えておく必要があるか
- ・ 理想を実現できるのか？
- ・ 現実的な問題は？
- ・ 妥協点を探る必要性 など



主体性

6

「主体性」とは何か？

7

参考

企業での主体的行動の捉え方

文部科学省大学入学選抜推進委員会（主体性分野）作成の資料より

企業人事担当者が考える新任社員の業務に関する主体的だと考えられる行動の例

- 言われた事以上のことをやる
- 1教えると、いろいろ推測して10質問してくる
- 自分の意見が言える
- 自ら積極的に行動する
- 自分の企画を上司に提案しているとき



10

参考

高等学校学習指導要領（改訂版）の表現から

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要の対策等について（審議）＜2016年12月＞

「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」

すべての教科・科目等を以下の3本の柱で再整理

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

「第1章総則」より抜粋

8

個人的な解釈としては

大学入試という場で「主体性」を考えた場合

「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」

に関するもの・・・？

11

高校と大学での主体的行動の捉え方

文部科学省大学入学選抜推進委員会（主体性分野）作成の資料より

高校教員が考える探究活動における主体的だと考えられる行動の例

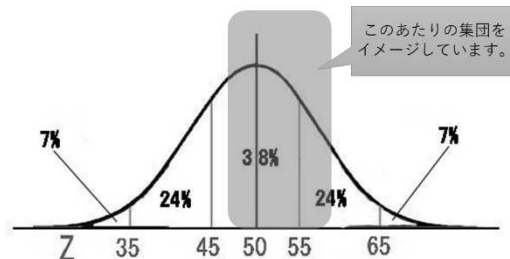
- 学外の人たちへのコンタクト、実際の連絡やインタビューの実施等
- 授業外の自主的な活動
- 生徒自身によるテーマ設定
- 課題研究のプロセスを生徒自身が常に臨機応変に変更する
- 他者と積極的に意見交換をする
- 発表の場に参加する
- 発表の場において質疑応答を適切にこなすことができる

大学教員が考える正課教育における主体的だと考えられる行動の例

- 学生が課題に対して、他の学生と進んで議論している
- 研究室に質問をしにくる
- 指示していない課題に取り組んだとき
- 実験計画を提案してきたとき
- 講義中に、板書の内容に疑問が生じて質問をするとき
- 学外での企画に参加

9

本日想定する集団の学力層



12

「主体性評価」へのアプローチ

13

各立場で評価方法も課題も異なる

行動主義的な立場からの評価

- 書類審査
- 面接試験
- ⇒ 評価コストは最低限
- ⇒ 多数の受験者評価も想定

【課題】

- 異なる分野の活動実績の比較
- 本人の関与の真偽

プロセス重視の立場からの評価

- 書類審査
- 面接試験
- パフォーマンステスト
- ⇒ 評価コストは高い
- ⇒ 限られた受験者を想定

【課題】

- 評価に掛ける時間
- 適切なルーブリック作成

☹️ どちらか一方が良いとは言えない

16

行動主義的立場からの評価

「主体性」

→

行動

→

成果や実績

主体的な成果だと考えよう

本当に主体的と言いつけるかは疑問

例) リーダーをジャンケンや輪番制で決めるなど

14

評価を行うための作業

この資質があるとなれば、どのような行動をとるだろうかを考える

主体性
協調性

行動A

行動B

行動C

行動X

行動Y

行動Z

「～の場合、〇〇をしている」など、具体的な行動や様子を洗い出し。
⇒ 評価基準作成のための材料となる

17

プロセス重視の立場からの評価

学びや活動のプロセスを重視

→

ポートフォリオ

学びの過程を蓄積

- どのように学んだか
- どのように困難を克服したか など

- 個人によって文脈が異なる
- 評価基準を作りにくい
- 評価に時間がかかる

15

構造化（ルール）した評価

主体性 「自ら明確な意思を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」

1

- 周囲に依存しており、物事に対する当事者意識が希薄である。
- 周囲の状況に影響されることが多い。

2

- ある程度自らの考えで行動している。
- 周囲の状況に流されることがなく行動している。

3

4

- 明確な意思を持ち、当事者意識高く行動している。
- 周囲に自分の考えを伝え巻き込んで行動している。

5

具体的な行動をもとに評価基準を作成

三村英典『人事アセスメント論』（2005）より作成

18

信頼性の高い項目と低い項目の存在

ある大学のAO入試における面接者の評価一致率（ルーブリック使用）

専門的な関心に関する項目 一定の一致率：50%～80%程度

意欲・態度に関する項目 低い一致率：10%以下

木村拓也・吉村晋「大学入試研究ジャーナル」(2010)

そうであれば

ルーブリックの
構造化の強化



(面接試験であれば)
面接者によって個別に工夫される
展開や評価の視点を**一定の枠組み
に押し込めてしまう。**

質問紙の方が適している
ことになるかもしれない

19

評価方法の検証結果から生じうること

- 主体性があると評価した学生が、入学後に本当に主体性があるかを検証することは重要（与評価の妥当性検証）例えば、入学後に「主体的」と評価される学生の多くが、入試の主体性評価の得点が高いなど。
- しかし、他の能力や資質（例：「知識・技能」や「思考力・判断力」「表現力」）と主体性の相関関係が強いということが明らかになった場合



主体性を持つ者は、
主体的にこれらの
能力等を身に付けている

直接評価する意味とは？

22

分析的評価と総合的評価

分析的評価（構造化した評価）

観点① 8点/10点

観点② 4点/10点

観点③ 2.3点/3.0点

各観点の得点の合計点
35点

- (欠点として考えられること)
- 各観点の設定の困難さ
 - 全体の印象と一致しない
 - 時間がかかる

総合的評価（自由度の高い評価）

観点① 7点/10点

1つ観点の基準に沿って採点

主体性



- (欠点として考えられること)
- 詳細なルールが共有できない
 - 信頼性に疑問 など

20

入試での評価とは別に考えておくべき点

「主体性」を直接評価しなくても、他の方法で主体性を間接的に評価できる。それも公平性が確保され、効率的だとしたら・・・



高大接続改革の重要な趣旨（中教審答申より） 高校教育への影響力

接続段階での評価の在り方が変われば、それを梃子の一つとして、高等学校教育及び大学教育の在り方も大きく転換すると考えられる。

23

どこまで点数化できるか

例えば、活動や実績等を中心に評価するとして



せいぜい4段階か5段階評価が現実的

21

入試制度設計で意識すべきこと

※ 一般入試での評価を想定

24

入試がもたらす影響力

大学入試 → 主体的な活動実績を評価しますよ → 高校生活での活動が活性化 → 健全な動機づけ → 素直にアピール

「主体的である」とこの道具の活用 → 「主体的」といえるか？

そんな活動や実績じゃ、「主体的」だと評価してくれないぞ

何が入試に有利なの？

入試に有利な活動や資格を優先的にやろう

25

実際の評価：ケース②

一定の基準を満たした者を対象に「主体性」を評価する場合

高得点

主体性評価

共通テスト + 個別学力検査

低得点

基準点以上の者を対象に評価（資格試験として扱う）
共通テストと個別学力検査の得点は利用しない

基準点

主体性評価の影響力は大きくなるが・・・

- 理想的あるいは適切な基準点を設定するのは困難。
- 競争倍率が低い場合は、基準点が機能しない。
- 主体性評価の公平性と納得性の確保がより求められる。
- 基準点以下の人たちは主体性評価対象とならない。

28

過大に認識されがちな「主体性評価」

大学入試 → 主体的な活動実績を評価しますよ → 過激な反応

例）「中高一貫校やSSH校が有利」「課題発見型カリキュラムがある方が有利」など

入試での評価の内訳

主体性 | その他

入試で主体性等の評価が合否を決定づけるような印象

本当に合否を大きく決定づけるようなことになるのか？

26

現実的な制度設計として考えられること

1. 主体性を評価したくても、その評価は技術的に難しい。
2. まず、評価技術として安定している手法（学力検査等）を用いて、入学者に求める不可欠な能力やスキル等を評価することが必要。
3. その上で主体性を評価したとしても、主体性評価が合否を決定づける影響力は限定的（ケース①の考え方）。
4. 主体性評価は、受験生にとって「適度な動機づけ」として機能することを旨とする方が重要ではないだろうか。

ただし、主体性評価をする場合の評価技術の信頼性・妥当性を高める努力は不可欠

受験生自身の「努力」が直接的に反映されやすい土台

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の評価

自らの高校時代の取り組みを「振り返る」という機会

29

実際の評価：ケース①

「主体性」に関わる資質等を点数化して評価する場合

共通テスト 500点 + 個別学力検査 400点 + 主体性 100点

高得点

主体性評価が0点でも合格となる受験者層

主体性評価により影響を受けるボーダー層

主体性評価が満点でも不合格となる受験者層

全体としてみれば、主体性評価の影響力は限定的なもの

- 配点は受験生に向けたメッセージ
- どの程度の差をつけて採点するか（実は重要）
- 採点の考え方は、大学・学部の方針 ⇒ それが**実際の影響力**となる

低得点

27

評価の議論とは別に考慮すべき前提

ところで、評価方法に注目が集まりがちだが・・・重要な前提がある

水槽の中の金魚

金魚すくいの道具

すべての金魚が、欲しいと思える金魚	何でも良い
すべての金魚が、欲しいと思えない金魚	何を使っても意味がない
欲しいと思える金魚が一定数いる場合（自分が欲しいと思う数と同程度）	確実にすくえる道具が必要
欲しいと思える金魚が少ない場合（自分が欲しいと思う数より少ない）	確実にすくえる道具、かつ足りない分をどう補うか

欲しいと思える人材を含む志願者集団の形成

30

